

517  
148

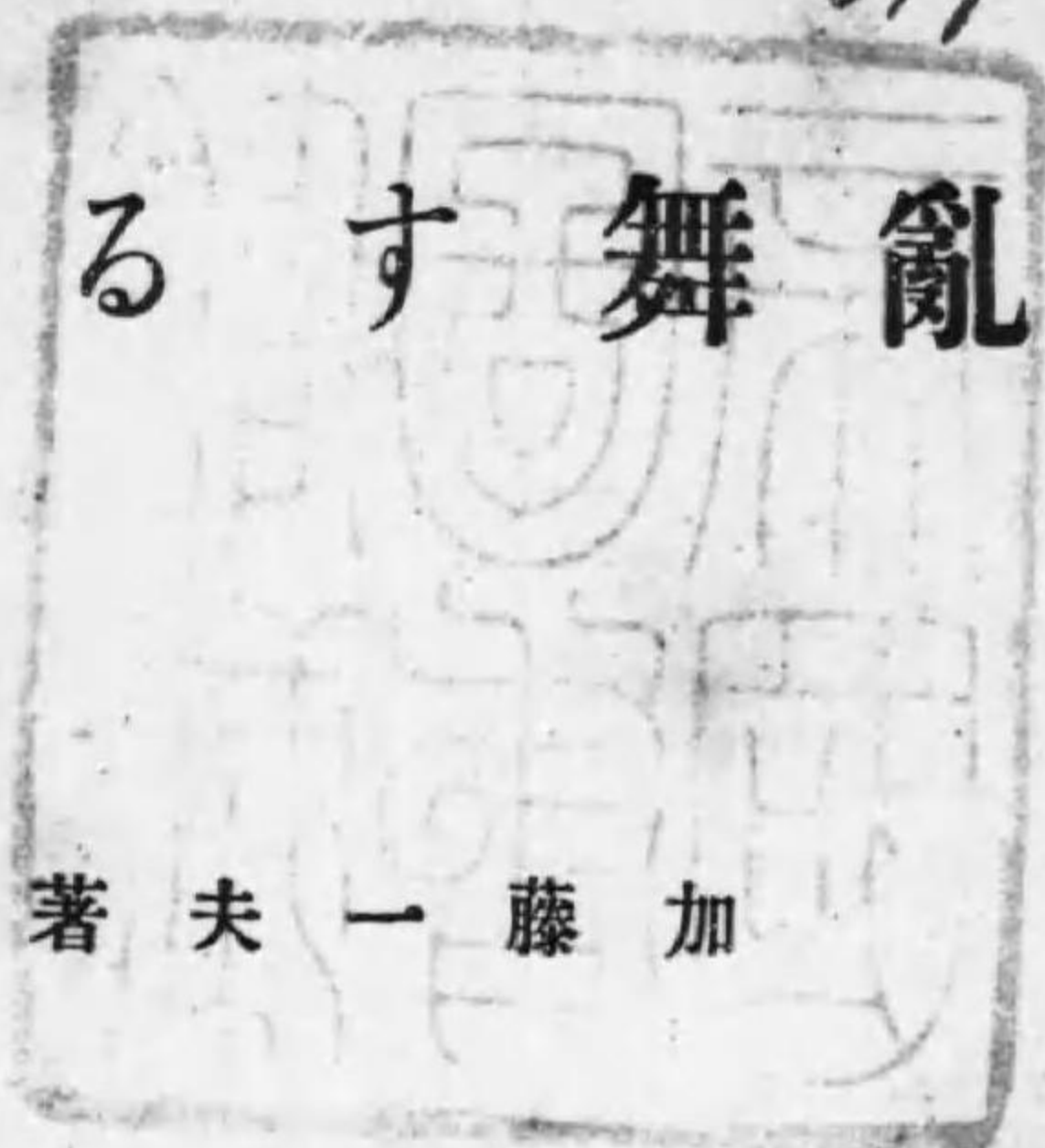
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5

始



577-148

亂舞する焔



著 夫 一 藤 加



大正  
12. 2. 27  
内交

目次

- 一 亂舞する焰……………三
- 一 悲劇の成長……………一四三
- 一 寂しき道づれ……………二三三
- 一 愛の復活……………二七九



焰

の

舞

序に代へて

私は見た

身をきるやうな冷たい風が

ヒュー／＼と吹く冬の日の黄昏どきに

小雀の群が一本の樹の小枝に群り來り

押しあひへし會ひ膚と膚とをくつつけ會つて

お互の體温と體温とで

お互を温め合はふとするのを

私は見た

不景氣風が世界ぢゆうを吹きまくり

冷酷な壓迫風が貧しい労働者街に襲つて來たとき

飢えと不安とに血と力とさへこゞえてしまつた労働者達が

自分にさへ足りない食物をわけ合つて

一つの集團をつくり

心火と心火とで温め合つて居るのを

さながら小雀の群のやうに

私は見た

ふれ合つた體温と體温とで

白熱の焰があがり

心火と心火とで階級意識の熱火があがり

世界ぢゆうが大きな〇〇〇となつたのを

あゝそして彼等自身が

やはり同じその火に焼きつくされたのを

あゝ 火の踊り 焰の舞

生きんとする意志の舞踏

いのちがいのちを焼く焰の亂舞

亂舞する焰

憎みたい

憎みたい

もしほんたうに お前達を憎めたら

こんな苦しみは しないですむだらう

そのときは

俺の此の情熱は 憎しみに集注され  
憤怒の焔に 自らを焼きつくし  
復讐の手段を考へる事に心が緊張し  
力を失つた生が戦闘の意慾にふるひ戦き  
苦惱と寂寥とが霧のやうに消え失せ  
俺はたゞ

傷ついた猪のやうに荒れ狂ふだらうに

それなのに それなのに

俺は憎めない

男らしくないと笑はれ

『そんなに弱い男だとは思はなかつた』と  
親しいものから憤慨されても

俺はなほ憎めない

いさぎよく別れる事さへ出来ぬ

今も尙俺は



信じて居るからだ  
俺のお前への愛をも  
お前の俺への愛をも

◇

だが それにしては  
何うして お前は俺を裏切つたのだ  
『私の愛が 酬いられなかつたことを  
あゝ 私はどんなに悲しむだでせう』と

あの夜 お前は俺に云つた  
妻よ もしほんたうにさうだつたら  
赦して呉れ  
なるほど 俺達の生活は  
幸福ではなかつた  
幾度か  
俺達の心は離されて居た  
俺はお前を憎みさへした  
お前も俺を どんなに怒つたかを

俺は知つて居る

とは云へ妻よ

結婚が俺達の戀愛を屠つたとしても

俺がお前を どんなに要求し 愛したかを

お前は知らないのだ

一とき——十分 五分 一分

お前が居ないと

俺は俺の家に寂しさを感じたのだ

愛の酬いられぬことを感じたのは

それはお前でなく

俺であると俺は思ふのだ

『わたし もう少しあなたを理解して居たなら

こんな事にはならなかつたらうに』と

お前は今 泣いてもだえる

あゝ 不幸なる俺達の生活よ

今はもう 歸らない  
永遠に寂しい人生を  
俺達はおくるのだ

◇

お前が俺の家を去つた後で  
ふと俺は

お前に宛てた彼の手紙の一つを見つけた  
あゝ その謎のやうな一つ／＼の言葉が

俺にとつて もつとも不快な想像を思ひ浮ばせるあの言葉が  
どんなに俺を苦しませたらう  
くやしい くやしい  
裏切られた事がくやしい

だが それなのにまだ俺は  
お前を憎めない

『何故もつと怒つて呉れないのです』と  
お前は云ふ

その心持ちは俺にもわかる

俺は怒つて居る

たゞ憎めないのだ

孤獨なる生よ!

俺はたゞ一人で生きる

◇

何時おれは此麼ことを想像したらう

何時お前は此麼ことを望んだらう

昨日 お前は云つた

『私は最初

あなたを去る考へなんか

毛頭もなかつたのです』と

俺は思ひ出す

お前が家を出るほんの二三日前

座蒲團が汚れたとて

新しい布片を買つて来て

新しい衣をさせ

日あたりのいゝ縁側でふくらませながら

『普段用には惜しいわね』と

さも嬉しさうに微笑んで居たのを

だれがその顔に

だれがその心に

家を離れてゆくお前を見たらう

お前自身でさへ

それを見なかつたのだ

残念だ

残念だ



あまりに俺は潔癖すぎたのだ

いや 俺ばかりではない

お前も同様に潔癖すぎた

その癖俺達はお互に

自分自身の純潔は主張しなかつた

何うしてそれが出来よう

お前も俺も

すでに幾度か傷いたものだ

使徒ポロと共に

わが肉の弱きを知つて

『あゝ此の死のからだより

われを救はんものは誰ぞや』と

信じても居ない神に祈り求めた俺達だ

それで居て俺達は

互にその純潔を求めたのだ

恐らくはこれにも

理由はあらう

お前と結婚してからこちらへ

眞に俺は何人とも戀した事はないのだから

何うしてあの夜

あの様に俺は もろくも絶望したらう

何で俺は あのとき

お前をしかと抱いて離さなかつたらう

俺の潔癖が

お前を俺から離してしまつたのだ



あの夜

澤山の來客をうつちやつて置いて

俺はお前を

小田原の海岸につれ出した

お前は

まだ寝つかないで居る興志坊を負んどぶして

俺の後について來た

俺の胸は怒りにふるへて居たのだ

俺は黙つて道を急いだ

お前は素直に 親しげに

俺と肩を並べて歩きながら

俺が横濱に行つて居た半日の間の出来ごとを

眞實のこもつた口調で話してきかせた

俺の胸は怒りにふるへてゐた

けれど 俺はたゞ

お前の言葉によつて 俺のその苦惱を拂ひきよめたかつたばかりだ

また 簡単にそれが出来ると思つて居たのだ

俺は正直な告白をお前に求めた

『ほんたうにお前は彼を愛して居るか』

お前は静に叩頭いた

『そんな事は信じられない』

俺は獨言のやうに云つた

けれど お前はたゞ黙したまへ

何とも答へなかつた



俺は絶望した

俺の潔癖が 電のやうに

俺の神経にきらめいた

「仕方がない

自分のいゝやうにしろ」

俺は絶望の聲を放つた

『もう二三日待つて下さい

何とかきめますから』

お前は柔順に嘆願した

『考へる必要がないぢやないか』  
俺はかうお前に云ひ放つた

あゝ 何で俺はそんな事を云つたらう

何でお前を抱いて

そんな馬鹿な事がない と

云はなかつたらう

それをする代りに

俺はたゞ

どんなにお前を愛して居るかを  
明らさまにお前に語つた

『それなら

何うしてもつと早く

その意志を私に示して呉れなかつたのです

今となつては仕方がありません』

かう云つてお前は

砂の上に泣き伏した

『俺は

お前がそれをわかりすぎるほど

わかつて居ると思つて居たのだ』

何の偽りもなく

俺はお前に云つた

『あゝ、あなたのそのお心を知らないですんだなら

私は苦しみなく行かれたでせうに』

再びお前はさめくと泣いた。

俺はたゞ 不可抗の運命を見た  
俺の力が

その運命に勝てない事を諦めた  
諦めながら悲しむだ

渚には波が打ち

波がひいた

さながら二人の心の潮のやうに

『大きな船が……』

何も知らない子供が

どんなに眠らさうとしても眠らず

二人の親の間に

何が起つても居るかも知らずに

ひたすらに昂奮した

曇つた空に 月がのぼり

冷たい風が 海面から吹いて来た

子供が風をひくのを俺は恐れた

『もう歸らう』

俺は立ち上つてお前を促した

『はい』

お前も澁々立ち上つて俺について来た

家には 遠來の客のほか

誰もとまつては居なかつた

哲坊は姪の寢床に眠つて居た

俺達はまた泣いた

『あなた 哲ちゃんをつれて来て下さい

哲ちゃんを』

お前は狂氣した女のやうに俺に云つた

お前は俺をしかと抱いた

俺はしかしお前を抱かなかつた

俺はお前を抱いた

お前はしかし俺を抱かなかつた

時にはお互に抱いたけれども  
直ぐにその抱擁は解けた

十二時 一時 二時 三時

お前は遂に極度に疲れて眠つてしまつた

俺は朝まで一睡もしなかつた

夜があけるのを待ちかねて

俺は外に出た

しかし何處に 俺の靈の安住があらう

俺は再び戻つて来てお前に云つた

『雪 もう起きないか』

『は』

お前は平常のやうでなく直ぐと起き上つた

お前は 顔を洗ひながら

とめどない涙を拭いて居た

俺は一碗の食も喉を通し得なかつた

食事がすむと

暫くたつてお前は云つた

『私夕方までに歸りますから

ちよつと散歩にやつて下さい

俺はお前が何處に行くのか知つて居たが  
俺はお前を拘束することを欲しなかつた

『マ、が歸つて來ない』と

子供達が云ひ出したとき

何で俺はお前を外に出したらうと

再び俺は後悔した

彼と會へば

彼はもうお前を捉へて離すまいと

俺は思つた

運命だ！

再び俺は自分に云つた

喧かましい子供をすかして

『マ、を迎へに行かう』と

外に出た

残暑の太陽が 猛烈に地上をこがす中を

俺は子供達二人をつれて街を彷徨つて歩いた

けれど 何處にも前の姿が見られよう

俺にひどくやられた尾行が

心地よげに俺の後について来る

子供をすかしく

俺は苦しみを胸にをさめて

家に歸つた

蒸し暑い日だ

十分と俺は一ところに止まつては居られない

Kが来た

俺の顔に悲痛な影を見て彼は心配し出した

俺はしかし何も語り得なかつた

お前自身のかはりに

車屋のもつて来た お前の手紙は

俺の心を落着かせた

たゞ 何故お前は

『あなたに愛憎をつかした』と云つて呉れなかつたのだ  
一ときの落着いたころが

だん／＼と亂されていつた俺のこの苦しみを

お前は想像が出来るか

◇

成るやうになつたのだ と俺は思つた

けれど お前の去つた最初の夜の

どんなに寂しかつたか

あゝ 俺の胸は踊り狂ふ

◇

次ぎの朝の食卓が

どんなに寂しかつたか お前には想像がつくまい

二人の子供



姪 俺

けれど 平常のお前の席は空いてゐる

何と云ふ静かな食卓だ

子供達さへ滅入つて居る

『叔父さん

無理にでも食べなけりや駄目ですよ』と

姪は まごころをこめて云ふ

だが 何うして食物が

俺の喉を通らう

涙がこみあげて来る

俺はそのまゝ食卓を遁げ出した

おひるの食事は

もつと俺に悲しかつた

それは同じやうな滅入つた食卓だ

俺はふと思つた

お前がうちに居たときは  
俺も随分わがまゝを云つたつけなあと

わがまゝは

俺と同じに

お前のものだった

俺達は赤裸々の自分と自分とで  
觸れ合つた

わがまゝと 剛情と

二つの自我の

火花をちらした接觸

俺達は互に

腹をたて 罵り合ひ

憎み合ひさへした

だが 今となつては

どんなにそれが 懐しい生活であつたか  
どんなにそれが 眞剣な生活であつたか

わがまゝを云ひ合ふ相手のない  
今のこの生活の

どんなに空しいことか

俺はいま はつきりとわかる

俺がお前を愛したのは また

いま お前を懐しむのは

お前のこの赤裸々なお前だと云ふことを

お前をやつてはならぬ

お前を俺の家庭から去らしてはならぬ  
俺はかう思ひ初めた

運命に反逆しよう

俺の愛を行くところまで行かしめよう

お前は歸らねばならぬ

お前の家は 俺の懐より他にはない

あゝ妻よ

歸れ 歸れ すぐ歸れ

お前自身の家に  
俺はかう叫んだ

お前はしかし新らしい欲望に燃えて居た  
その上

彼の執着は蛇のやうに強かつた

刻々に移つてゆく俺の気分は 再びもとの冷靜に歸つて行つた



哲坊をつれて

東京へ日がへりの夜 ふと俺は

驛の改札口にお前を見た

俺は驚いた

俺達の顔を知らないものゝない驛の人達が

俺達の周圍に眼を集めた

『何處へ行くんだ』

俺は小さな聲で お前に云つた

お前は懐しさうな眼を向けて俺を見た

『うちへ行くのか』

俺は再び訊ねた

『ええ』

お前は答へた

俺は直ぐに車を呼んだ

お前は歩いて行かうとした

『おい 車に乗るんだ 車に』

俺はお前を無理に車にのせた

何處からともなく

何時とは知らず

彼の姿があらはれて來た

不安の色が彼の顔に見えた

俺はいま一臺の車を注文した

俺が小田原に居る間

いつも俺の敵役をつとめた警察署長が

二三の警官と共に

俺達の車が驛前を離れるまで立つて眺めて居た

家には

KだのHだのAだのその友人だのが集つて居た

みんなはお前の態度に腹を立てた

俺はしかし

腹をたてながらも喜んで居た

彼はすや／＼と眠つて居る與志坊の枕頭に

頭を垂れて座つて居た

お前は急に寒くなつたので衣をかへた

みんなが俺の書齋で話し合つて居る間に

お前は與志坊を抱いて泣きくづほれた

『よつちゃんよつちゃん』

寢入つて居る子供を

お前は揺ぶり起さうとした

『いけない いけない』

眼をさまさせてはいけなう』

俺は苦しい胸を凝乎とおさへて

お前をはねのけた

『起きてもい』

起こさして下せう』

お前は神経的に泣いた

だが みんなが歸つて

俺たちばかりになつたとき

お前の氣持ちはすつかりと變つて居た

お前は冷酷な 氷のやうに冷酷な 強い女になつて居た

俺は お前の心の内容をわかつて居た

俺の鋭い洞察は すつかりお前の心を見ぬいて居た

それにしても餘りにお前はヒステリックであつた

すつかり理性が失はれて居た

十一時を過ぎてお前達は

再び俺の家を離れて行つた

お前が 寝て居る子供と別れた光景を  
誰が涙と恨みなしに見られたらう

おゝ何と云ふ悲劇であるか

戀を戀する——俺はさう云ふ 科學的な眞理としてさう斷言する——お前の  
心

子を懷ふ親のさびづな

お前はその一つを選んだ

選ぶべく餘儀なくされた

けれど どんなにお前の心が強くとも

何うして此の子達を忘れ得ようぞ

お前達の去つた後で

何だか俺は胸がせい／＼した



大阪のSが訪ねて來た



かつて俺が 神學校に學んで居た頃  
親友のKの戀人が  
道でひろつて來た當年の美少年だ  
お前も彼を知つて居る  
彼と俺との關係も知つて居る  
彼は今 もぐり實業家だが  
感心に俺のことは忘れない  
『夕飯と一緒に食べて來ませう』と  
彼は云つた

俺は彼と一緒に家を出た  
かつてお前と二人で  
鶏肉を食つた同じ料理屋だ  
而もその同じ部屋だ

飯も食はず 酒ものまないで居た俺は  
久しぶりで不味い酒をのんだ  
初めはとても咽にはとほらなかつたけれども  
直きに俺の舌は酒になれた

電話をかけてKを招んだ

俺を車で迎へによこしたS子と 二人の女もよばれた

俺は浮きたくなかつた

たゞ酒をのんだ

Sは女達を相手に歌をうたつて居た

その間に 俺は寂しさに泣いた



Kと二人で

東京に家を見つけて歸つて來た

音楽家のSが演奏旅行から歸つて居た

Kは自宅に歸つて

お前から俺への郵便をもつてやつて來た

何と云ふ喜びの音づれだらう

お前はお前の行爲を悔やんで居る

嚴肅な心で知らざる神に祈つて居る

『表調子な笑顔』

それは跡かたもなく消えてしまひました』  
かうお前は告白する

『緋文字のA』

それを自分の心に縫ひつけて居ます』

かうお前は懺悔する

『あなたと別れて』

初めてあなたの人格が  
わかりました』

かうもお前は云つて居る

せめては 此の悲しい喜びを

お前の心の更生を

お前と一緒に喜んで呉れと

お前は云ふ

おゝ 喜ばう 喜ばう

ほんたうに喜ばう

けれど妻よ

その喜びは

お前の云つてゐるやうに

悲しい喜びであるのを忘れて呉れるな

悲しい喜びよ

寂しい喜びよ

いまでも此の詩を書いて居るとき

眠りからさめた病める哲坊が

『マ、』と呼んでから

お前の居ないのに気がつく

『バ、居ない……』と泣いて居る

お前が居なくなつてから

子達は俺をとらへて放さない

一ときも放さない

お、これでもほんたうに

心の底から喜べるだらうか

悲劇 喜劇

そして無

おゝニヒリストに悲しみが無いと誰が云ふ

また 悲しさ 苦しさが無いと誰が云ふ

思ひさき俺は泣かう

悶えよう

苦しもう

そして 哄笑しよう

俺があんなに蔑しんで居たセンチメンタリスト

それは 俺のことであつたのだ



いよ／＼俺は

東京にうつる事になつた

お前の所有物は お前にやらうと

俺はお前をよんだ

お前は 黙つて こつそりと

俺の書齋にとほつた

お前は お前のものを全部

東京にもつて行つて呉れと云つた

打ち碎けたる 従順なるお前を 俺は見た

子供達は お前の來て居るのを知らない

子供達は 俺の姪を親のやうに慕つて甘えて居る

お前はもうたまらなさうに見えた

『あなた子供をつれて來て下さい……何うぞ』

何うしようかと 俺は惑つた

一度は つれに行つた

けれど 思ひ直して戻つて來た

お前はまた 嘆願した

ためらひ／＼ 俺はたうとう

興志坊を抱いて お前の前にたつた

『よつちやん、よつちやん

あれはだれ?』

俺は興志坊に云つた

『よつちやん、よつちやん』

マ、よ！』

お前は寂しい微笑みを見せて彼に云つた

與志坊はたゞ キョトンとして

お前を眺めた

さながら 誰か初めての人に會つたときのやうに……

彼がどんな心持ちに在つたか

俺には わからぬ

けれど 何と云つてもそれは

餘りに寂しすぎることであつた

俺は與志坊をつれて お前の側に寄つた

お前は椅子から立ちあがつて

與志坊の方に両手を差し出した

與志坊の顔からは不審の眼ざしが消えた

はじめて彼は ニッコツと笑つた

與志坊は お前の手にうつつた

お前達二人は

互に頬をすり合はせて喜んだ

涙がお前の頬を瀧のやうに流れた



新聞の通信者が

俺達のことを通信したのを知つたとき

俺達はたしかに狼狽した

臭いものに蓋をしようとするのではない

俺は お前がきつと

歸つて来るのを信じて居たからだ

それが 天下に知られては

お前の心がかたまるのを恐れたからだ

お前も勿論 最初からそれを恐れて居た

彼も同じやうに……

俺は お前をつれて東京に出た



あゝ 二時間半の汽車の中で  
幾度 俺達は泣いたことか  
涙が出ると俺は  
窓の外に首を出して  
そつと顔を拭いた

二つの新聞社を俺達は訪ねた  
俺達は 友人の好意を感謝した

けれど 自分達の行爲にも恥を感じた  
『成る様になれ』と俺は考へた

さながら 戀人のやうに  
俺達は街を歩いた  
何ごとも知らない哲坊は  
二人の親の睦じさに狂喜して  
賑やかな街の灯の美觀に打たれて  
よくしゃべり よくはしゃいだ

銀座の街の小料理屋の二階で

俺達は夕べの食事をとつた

俺は

幾度かお前と一緒にだつた かうした場合を思ひ出した

其れが此の上もなく懐しまれた

あゝ それにしては

何と云ふ寂しさだ 今は

もつとも大切なものが缺けてゐるのだ  
二人の手はつながつて居ながら  
からだは 魂は  
隔てられた溝の両側に置かれてゐるのだ

尾行をまいて

俺達は電車に乗つた

俺はお前を

お前の友人のところを送りどけた

哲坊もお前に預けた

俺は俺の舊い友達のところに行つた

あゝ 彼の夫人は

お前の親しい友で

幾度俺達は往來したことだつたらう

夜の十時をすぎて居るのに

彼の家は 琵琶の稽古に夢中だつた

俺は友と一緒に酒を飲んだ

絶望的な俺の言葉が

彼等を怪しませた

俺はたうとう

胸のくるしみを打ちあけた

いくら飲んでも酒には酔はなかつた

心が 神経が 煩惱が

風に亂れる焰のやうに 荒れまはり荒れ狂つた

あゝ かつて俺が  
人生を焰の舞踊にたとへたことを  
お前は覚えてるだらう

それだ

いま俺が痛切に感ずることは  
この俺が 亂れ 舞ひ 踊る  
焰だと云ふことだ  
焰！

焰！

燃えるだけ燃える  
狂へるだけ狂へ  
それが燃焼しつくしたとき  
そのときこそ平安があらう  
寂しい虚無だ  
俺はしかし それに憧れる

◇

借りて置いた新居に

お前をつれて来たとき

何よりも先きにお前は

落着きのない家だと云つた

建具がお粗末で

門にしまりのない事を苦にした

『いゝよ、これは俺のうちだ』

お前のうちではない』

俺は寂しい笑ひを見せて云つた

『はつきりさう云ひましたのね』

お前も同じ寂しさをもつてそれに答へた

お前はまた

此の所は何うすればいゝの

かう ればいいの と

俺に注意をしながら

『やつぱり世話をやいて見たいわ』と

云つて笑つた

お前の胸にも寂しさはあつたらうが

俺の寂しさはお前にわかるだらうか

小田原に残しておいて来た人々が

家財をまとめてやつて来るのを

俺達は待った

待ちながら俺達は

俺達の話しをはじめた

あゝそれこそは

打ちやはらいだ心でもつて

寂しさと苦しさを包んだ心でもつて

魂と魂との

自我と自我との

厳そかな しめやかな 接觸だった

『最初から俺はお前を

ほんとうには愛して居なかつたのだと

あなたは よく人の前であつしやつたわね

あゝ わたしどんなに悔やしかつたか

私の一番たふとい寶玉が  
滅茶々に壊されましたことを  
その悲しさを その寂しさを  
あなたは わかりますか』  
お前は恨めしげに云つた

『あゝッ』

俺は鋭い針で胸を刺されたやうに  
ギクリとしてお前に答へた

『それが それ程お前を苦しめたのか  
それなら赦して呉れ  
何で俺が

そんなことを本気で云へよう

お前は俺を 信じ切つて居ると思つたから  
俺はそんな冷酷な冗談も云つたのだ  
なるほど俺は

心からお前に腹を立てたときには  
俺はほんたうに

お前を愛して居たのか知らと  
疑つたことはあつたが  
決してそれを信じたことはなかつた  
あゝ 憐れなものよ  
それほどお前は 俺の愛に渴いて居たのか  
赦して呉れ  
俺がわるかつたのだ』

お前は泣いた

さめくと泣いた

『餘りむごたらしい冗談です

なんで ほんとうのことを

云つて呉れなかつたのです

あなたは一體

強がりです お面かぶりです』

俺は ほんとうにわるかつたと心に悔いた だが  
同じ失望を お前の言葉から受けたことを



俺は思ひ出した

俺はお前に云つた

『だがお前だつて同じでないか

お前は お前が俺の懐にとび込んで来たのは  
追はれた鳥が

ところかまはずとび込んだようなものだ

云つたではないか

おゝ、どんなにそれが

俺の感激を殺したかを

お前は知つて居るか』

『私たた』

負けぬ氣で それを云つたのです

あゝッ、あゝッ』

「負けぬ氣で！」

俺は嘆息した

『負けぬ氣で！』

お前はまた

絶え入るやうに 身もだえしながら  
泣きくづほれた

お前が俺の魂の中にとび込んで来たときのことを  
俺は思ひ出す

それは冬も深い暮の師走であつた  
病んで入院して居る父を

お前は毎日のやうに見舞つて居た  
その度ごとに

お前は俺を訪ねた

病院では ほんの少しの間

俺のところでは 時がないかのやうに……

お前は俺に

姉さんがもつて行けと云つたとて

美味しい鮓をもつて来て呉れたこともあつたつけ

俺と書生のTとが

鹽辛い豚のゴツタ煮をお前にふるまつたこともあつたつけ

それは雪の降る日だつた

俺のところまで遊びほうけて

たうとお前は 父を見舞はなかつた

朝から夕方まで

夕方から夜おそくまで

お前が歸るとき

俺は 車をお前のために雇つてやつた

お前が歸つた後で

俺達は直きに寝た

トントン と玄關の戸が鳴る

Ⅰが戸を開けた やがて

俺は俺の部屋に

お前の姿を再び見た

はじめて俺達は

こゝろゆくまで抱擁した

魂と魂とが一つにとけた

あゝそのときの

感激のうしほよ！

かうした俺の感激が また

胸の至聖所にひめておかれたお前の寶玉が

かうした不用意から

だん／＼と傷けられ

壊はされて行つたとは

何と云ふ なさけないことだ

『お互に

素裸な感情を見せなかつたことが

此の不幸な破綻のもとです』

お前は涙にくれながら云つた

『おゝッ』

俺はたゞ 煩えた

品

あの時に語つた一々を

いまは語れない

語る必要もない

けれど

お前のこゝろが

だん／＼と亂されてゆくのを俺は見た

お前の魂が だん／＼と分裂してゆくのを俺は見た

『あゝ、いつそここんなことが

少しもわからなかつたなら……』

お前はなげいた

或るときは

お前は彼を すつかり忘れて居た

お前の家 子たち

信賴する夫

そののみが お前の胸にあつた

だが お前はまた

彼のことを思ひ出した そして

自分が今 二人の手を握つて居るのだと

氣づいてゾツとした

『もしわたしが

たゞ家出をしたのなら

とうに私は歸つて居るのだが……』

お前はまだえる

そのもだえよ!

俺はお前のもだえを哀れに思ふ

思ふには思ふが　それがまた

俺の心を　なやます

こみ入つたなやみだ

凝乎とそれを

噴めては居られぬ惱みだ

◇

人が生きるとは

それは欲望することだ

人は欲望する

欲望は 満足を知らない

いつでも 新しいものを求める

だが その欲望を止むときがある

それが人生の終りだ

そこにはたゞ ニヒルの世界がある

お前は欲望する

かぎりなく欲望する

それが 虚無になることを知りながら

なほ欲望する

それは俺の思想だ

俺の見た科学だ

お前はその実行者だ

おゝ お前の思想の先生は今

実行に於てお前の弟子とならう

俺は お前を失つた  
その代り

新しい欲望の情熱を得た

俺も欲望しよう

食欲の充足運動に

一切の他の情熱を

枯れさせようとして居た此の俺に

お前は新らしい情熱を甦らせて呉れた

あゝ 戀愛こそ人生の花  
それは甘く 美はしい  
朝に咲いて 夜に散らうと  
それが何のわづらひぞ

戀ひて〜戀ひ死なう

戀のためならば 此生命もすてよう

わが情熱のつゞく限り 俺は戀をしよう

戀ひて踊らう



戀ひて舞はう

戀ひて狂はう

亂舞！

亂舞！

人生を何うしなければならぬと云ふことはなし

人生は こんなものだと言ふ現實もない

あるものはたゞ

われ等の欲望

われ等の衝動

わが人生は

寂しき人生

悲しき人生

孤獨なる人生

すべてのものは俺に背く

すべてのものは俺の心知らない

俺はたゞ俺の人生をもつ

青白い月の光よ

その冷たい澄みわたつた光の海よ  
それが俺の人生だ

俺のうちの藝術家がいま

俺のうちに甦つた

俺のうちの本質的なものゝ本質

——詩人がいま 俺のうちに復活した

おゝ 俺はこの俺の藝術でもつて

俺の人生を 俺の光と色とで塗りかへよう

詩人こそ唯一つの帝王

俺のこの 悲愴なる決心に

お前は 泣いた

俺も俺自身の 雄々しさに感激して

泣いた

とは云へ

またしても にぶる此の決意よ

俺はまた 弱き一個の人間

俺はお前を 放しはせぬ

お前は おれのもの



小田原に残しておいた人達が来ない

家財 道具は なほ更のこと来ない

俺とお前とは

もう六つにもなる子が側に居るのもかまはず

二人の不幸な 結婚生活を語りつゞけ

泣きつゞけ

ハンカチーフを水にしぼつた

そのとき俺は

快活な聲と顔とをもつて  
お前に云つた

『もつと他の思ひ出がないか  
あるならそれを話して呉れ  
あゝ 思ひ出が  
それが何であらうと  
ありつたけ話して呉れ』

しばらく考へた後お前が語つた  
あゝ その滑稽な思ひ出よ  
それが  
どんなに俺達の胸をえぐつたか  
お前は話した

『私達が  
初めてあの鶉山の家に住まつたとき  
私達の小さな庭に

草花の種がまかれました

ダリア カアネエシヨン

百日草など

そのうちに バルサムと云ふのがあつたのを

あなたは覚えて居る?

その名が氣に入つたとて あなたは

朝となく夕となく

そのの芽生えるときを待ち望みました

そら あの頃あなたのところは

英語をならひに来て居たお弟子さんのうちに

Mと云ふ方があつたのね

あの方が

私達に草花の肥料をもつて来て下さいました

あなたはそれを喜びながら

小さな苗床に施しましたのね

中でも一番よくあのバルサムに

バルサムがだん／＼と育つたとき

「何だか鳳仙花のやうだな」と

あなたはあつしやいました

「さうですね　あまりよく似すぎて居りますわね」と

私も答へました

バルサムは移植され

幾度か肥料が施されました

あゝそして私達は

それがたゞの鳳仙花であることを知りました

私達は互に顔を見合はせて苦わらひしました

あゝその時のあなたの顔が

ありありと見られます』

『あゝバルサム

あゝ鳳仙花！』

俺はかう　幾度繰返した事であらう

俺の愛し育てたものは

俺の望んだものではなくて

俺の思ひもよらぬ草ばなだつた

せき来る涙を俺は抑へ得なかつた  
俺は泣いた  
聲をたてゝ泣いた

「あゝッ」

「あゝッ」

お前も一緒になつて泣いた  
お前もお前の愛し育てた結婚が  
こんなものにならうとは

夢にすらも思はなかつたらう



あひゞきのやうに四日間がすぎた  
家財道具が送られて来た  
與志坊はマ、の代理者に抱かれて来た  
俺達の別れる日が来た

心の緒が結ばれながら

更に新しい緒にひかれてゆく女よ  
俺はお前の心のうちの苦しみを知る  
けれど 俺はさらにその苦しみの上に  
充すことの出来ぬ寂しさを持つのだ  
俺はやはりひとりなのだ

◇

三人が三人とも  
お互ひに獨立して

自分の途を獨りで歩まう  
俺達は かうさめた

お前は お前の住家を  
彼は彼の住家を  
子達をつれて  
俺はお前の貸間を見つけて歩いた

けれど 妻よ



それはお互に不自然だ

俺はもう

その苦しみにはたへぬ

俺の弱い神経が

何うしてこの上の重荷にたへようぞ



俺達ちが小田原に行つて居た間

Iのところは預けておいたT子が

俺が東京に歸つて來てから

俺の家に戻つて來た

三十九度の熱を病みながら

さながら自分の家にも歸つて來るやうに  
車に乗つて歸つて來た

あゝ、だが彼女が父と頼むものは居るが  
母は何處に居るのだ

彼女の寂しい顔を

俺を見て泣き出しさうにした顔を

お前は想像が出来るか

俺はわざと顔をそむけた

何か元氣のいゝ事を云つた

寢床をとつて彼女をやすませた

だがT子の熱は昇る一方だ

醫者をよんで來ると

T子は感冒のほかに

肋膜炎をいためて居る

夕方まで遊びほうけて居た哲坊が

十時ごろになると むつくり起きて

水をのみたいと云ふ

『熱が出たな』と俺は思つた

額に手をあてゝ見て

如何に俺は驚いたか

額は熱湯のやうに熱く

顔は朱に染んで居るではないか

俺は直きに水を汲んで来て

哲坊の額を冷やし初めた

『ひどい奴だつて云つて居る』

と哲坊は云ふのだ

『何を？』

と俺は訊いた

『ひどい奴だつて』

あゝ 何の事だ

彼は熱にうかされて居るのだ

三度俺は訊ねた

『何だつて？』

彼は初めて意識を取り戻した

『ひどい奴だつて云つて居る様だよ』

それをきいた俺の胸が  
どんなであつたとお前は思ふ

俺はお前を恨んだ

恨まずに居られようか

氷枕は引越しのどさくさで  
何處かに見えなくなつた  
俺は街に出た

氷嚢と氷枕とを買ひに――

だが 夜はもうおそい

氷はない

氷枕!

二人の子の濕布

『彼女が居れば

こんな事には なれて居るのだがなあ』

と俺は思つた

あゝ 何事にでもこれだ  
何事にでもお前を思ひ出す  
これは俺の愚痴だらうか  
男らしくない俺の愚痴だらうか  
俺の胸は痛む



今度こそ  
思ひきつて別れよう

かうして  
お互ひに往來することは  
もう 此の俺には耐へられない

疵を  
絶え間なくつしくやうなものだ  
このまゝにして置いても  
永遠に癒ゆる事のない此の疵だ  
それを絶え間なくつゝいてはたまらない

お前達二人を

——たとひそれは戀人のやうではなくとも

あの薄汚たない部屋に見るとき

もしくは

俺の家に見るとき

あゝ俺の心がどんなに痛むかを  
お前は知つて居るか

また

小さな子達ちが

あれほどお前を慕ひ

追ひ 泣き 喜ぶのを見るとき

お前が それを苦しむのを見るとき

あゝ俺の心がどんなにうづくことか

俺は

お前の胸のうちに

いやまさりゆく苦惱の雲を見る

その黒雲の影が

彼の心を暗くし 重苦るしくするのをも

妻よ

お前の靈魂の

すつかり打ち碎かれたことを

俺は知つて居る

同じやうに 俺のこゝろも

俺達は

互ひに失つた

俺達の無上の生命を失つた

けれど

今こそは より以上のものを

俺達の自我のうちに見出した

悲壯な美が

蒼白い月光のやうな冷たい美が

俺達の情熱の焰から

立ちのぼり

噴き出し

すつかりと俺達の人生を

新しい色で塗りつぶしたではないか

ニルバアナの美よ！

虚無の世界の美よ！

あゝ

思ひきつてわかれよう

新しい美を育てよう

『さやうなら』

『さやうなら』

『さやうなら』

『さやうなら』





だが 何と云ふ寂しさだ

俺達はもう

すつかり離れてしまったのであらうか  
今に離れてしまふだらう

いや かへつて一つになるだらう

お前は歸るだらう

俺はよろこんでうけいれるだらう

いや 行くすゑのことが

何うしてわからう  
そんなことは何うでもいい  
成るやうになるのだ



昨日一日

カルモティンをやめたら

昨夜はまた

殆んど眠れなかつた

夢！  
夢！

俺は夢を見たのだ

俺達は小田原の海岸に

小さな家を借りた

俺達の荷物はまだとかわれない

それなのに

お前は自分の荷物をくるめて

誰かのところへ嫁いでゆく

亡くなつたお前の父が俺を慰める

けれど 彼は此の世のものでないのを

俺は知つて居る

姪も 縁づいて家を去る

俺は寂しい心をもつて

たゞそれを見まもつて居る

たゞ一人俺の側に残つて居るのは

俺の故郷の

お前も知つて居る俺の従兄のSだ  
ところが

そのSも船に乗つて歸るのだと云ふ

俺は彼をとめたが

彼は俺の言葉を用ひない

彼もつひに去つた

たつた一人俺は

荷物も解かれぬ家に残つて

しよんぼりと

憂ひに沈んで居る

眼がさめて

俺はその寂しさを凝乎とこらへた

そこへお前からの郵便だ

その手紙の中には

お前の夢が記されて居る

何と云ふ暗合だらう

お前は云ふ

『私は昨夜

汽車に乗りおくれた夢を見ました

みんなが汽車に運ばれてゆきます

窓から首を出して

私を呼んで呉れます けれど

私は何うすることも出来ませんでした

私はひとり取り取りのこされたのです』

俺はこの夢の話しを

涙なしには讀めなかつた

枕は涙でしつぽりと濡れた

何で そんなに悲しかつたのか

何で そんなに寂しかつたのか

俺自身にもわからない

『おろかな奴だなあお前は』

俺はかう自分に云ふ

『なんで愚かなことか』

他の俺はそれに抗議する

あゝもう何のことだかわからない

わからない

わからない

恐らくそれが

一番ほんたうのことであらう

悲劇の成長

何と云ふすばらしさだ

おゝ 此の悲劇の成長よ

わが愛するものゝ幸福を食ひ  
わがいのちそのものを屠り  
われ等の悲しさ苦しさを

何の容赦もなく ふみにぢつて  
たゞ自らを生きる悲劇よ  
何と云ふ素晴らしさだ  
お前のその成長の力は

おゝ 悲劇よ

盃を あげよう

俺達の不幸のために

お前の成長への祝福のために

成長せよ

成長せよ

成長は いのちあるものゝ定まれる按だ

成長は 歡ばれるべきものだ

成長は 祝はるべきものだ

歡ばう

祝はう

踊らう

狂亂して歡び歌はう

狂亂して笑ひこけ、踊り斃れよう

成長のはての定まれる運命——

虚無のために

ニヒルの世界のため



何れの道を選んでも

お前の成長には變りはなかつたのだ

お前は のびる丈けはのびる

俺達——俺、妻 子達——をその

大きな口の洞穴に

呑みおぼせるまでは

いまこそ俺は

俺自身をお前に献げよう



いや

俺の妻をも 子達をも

——それは餘りむごたらしいことではあるが  
それみせんすべのない事實だ

お前の不可抗の力のためだ

いまこそお前は

俺の敵ではない

仲のいい俺の友だ

俺はいま

お前と結婚したのだ

あゝ 何者の力も永遠に引き裂くことの出来ない結合だ  
なぜならば

俺達は互ひに抱き合つて

永遠に虚無の懷に眠るのだから

おゝ 祝つて呉れ

俺の友よ

俺の敵よ

友と敵と 互に手を握れ

君等がほんたうに手を握ることの出来るのは

たゞ此の饗宴の席ばかりだ

さあ はやく握手するんだ

その手がとけたら

此の杯をとれ

血潮で塗られた朱塗の杯だ

大きな大きな 限りなく深い杯だ



おそろくあの時――

ほんたうの意味で俺が

妻の自由を許したとき

また

妻をその若き愛人に與へたとき

妻が後目をふらず

彼と一生を共にする事を決行したのだつたら

悲劇は こんなにも濃厚には演じられなかつたらう

あゝ しかしそれはその場合

不可能のことだつた

冷酷な運命は

自分の道を進まねばならなかつたのだ

また

妻の本心が——目ざめた魂が

誤れる道をふみかへさねばならなかつたのだ

——再びまた

慾望の歡樂に誘はれ 欺かれ

その甘い陶醉のはてに死を迎へんがために

見はてぬ夢だ

——もしその夢を見はてたなら

そこにはたゞ

悔恨と生の消耗ばかりが残つたらうが——

でも 見はてぬものには

想像の歡びがのこる  
悲劇が成長する

もしあの時

妻が再び 俺の懷に歸つたとき

俺が妻を つツばなしたなら

あゝ 何と此の胸はせい／＼してることだらう

だが 何うして運命がそれを許さう

また 俺の愛がそれを卻け得よう

世間の同情が俺から去つたと  
親しい女の友が云つて呉れる

あゝ しかし友よ

世間の同情！

俺にとつて それが何だ

俺は苦るしんでもいゝ

死ぬほど惱まされてもいゝ

俺の名と勢力とが泥にまみれてもいゝ

俺はたゞ 俺の本然に生きる  
運命と手をつないで生きる

俺は悲劇と結婚したのだ

悲劇のうちに喜びあれ

愛の喜びあれ



もしあるとき

妻が ほんたうに俺を去つたなら  
悲劇よ

お前は そのまゝ死んだらうか

いや いや

何うしてお前が

そのまゝ くだばるものか

執拗ないのちよ

何よりも多く

俺は妻の不幸を見る

最愛の子に離れた女

俺のこの真心から離れた女

妻の純真な魂は甦る

甦った魂は まことの愛の糧を慕ふ

そして悲劇は

日増日まじに成長する

あゝ それを思つただけでも

俺の魂がどんなに痛んだか

俺は魂のどん底で感じたのだ

俺のまことの愛を受け納れなかつた

受け納れ得なかつた

哀れな女の寂しさを

俺の魂はいたんだ

あゝ それこそほんたうに

我を忘れた純真な心の苦しみだつた

それとこれと

おゝ 俺の魂が何うしてこの  
苦惱から免れ得ようぞ

歸つた妻を俺は迎へた

こんどこそは

骨を粉にしてもお前を救はう

お前の幸福を取りかへさずには止まない  
俺はかう 妻に誓つた



今こそお前達の

自由と幸福とを認めるときが來た

さあ 大つびらに手を携へて

お前達の 幸福な兩親の家に歸つて

何不自由ない生活をたのしめ

自分達の幸福にしたるとともに  
両親の心に安心を與へよ  
俺はかうお前達に書いたのだ

『急に私は歸りたくなつたの』  
あの手紙を見た刹那から  
歸つて來たお前は俺に云つた

『あの手紙を見て 奥様は

たゞ子供達への愛のためばかりでなく……  
あゝ 後はもうおわかりでせう』  
涙にむせんだ彼が云つた

『何時でも俺は

お前を受けいれる

それは最初から俺の云つた言葉だ  
けれど

お前の胸に無理はないか』



だが 何うして無理がないと  
お前が云へやう

お前のかはりに彼が答へた

『あゝ わたしは

今迄あなたが惱んだその同じ悩みを

これから後くり返さねばならないのです

………』

再び彼は涙にむせんだ

不幸なる青年よ

いまこそ俺は

心からお前を

不幸なる青年よと呼ぶことが出来る

俺はお前を

抱いて泣き度かつた

お前のその不幸のために



とは云へ 俺の心はまた亂れる  
妻の心の亂れるとき

あの狂亂の手紙

あのぶしつけな訪問

あの獨りよがりの文章

だが それも恐らく

仕方のないことだらう  
何うして人は

こんな場合に冷靜であり得よう

冷靜ではあり得ない  
けれど

それが爲めに妻の心を亂し

俺の自我をあまりにひどく蹂みにじつたとしたら……

あゝそのとき 誰が俺に  
冷静を要求する権利があらう  
俺にも俺の感情がある  
今まで抑へておいた感情が あゝもはや  
俺の命令に聽かうとは  
俺には思はれぬ

不幸なる俺達の運命よ  
しかし何れかを選ばねばならぬ

不幸を

これ以上に 育てぬために

◇

妻よ

お前は歸つて来た  
けれど

俺の胸のうちにはなく  
たゞ お前の子達の家へ

歸つて來るときには

たゞに子達の家へばかりでなく  
俺の胸のうちにも歸つたのだが  
さて歸つて見ると

まだ享樂しつくさなかつたものへの未練が  
むら／＼とお前の胸に押しよせて來る

そして此の俺への愛の復活は  
芽生えのまゝに萎まされる

理性が——お前の理性が

どんなに俺を愛しようと努めても  
どうしても もとのやうにはなれない  
愛着が彼から離れられない

お前は自由を主張する

お前はお前の自由の前には  
一家の主婦としての  
妻としての

愛らしい子達の母としての  
責任感をも踏みつけようとする

おゝ 自由であれ  
だが 責任を負へ

母が父をないがしらにして  
情人と甘い戀をさゝやいて居るのを  
もし子たちが知つたら 何うだらう

お前は「海の夫人」のエリーダを知つて居るか  
戀人から無理に離されて  
ある醫師と結婚したあのエリーダが  
責任と云ふ言葉にギクリと胸を打たれ  
つひに戀人を思ひきつたあの事がらを  
極端な自由の觀念から イブセンは  
ノラを夫から去らしめた  
けれど そのノラは  
エリーダとなつて 今一度

夫の胸に歸らねばならなかつた

◇◇

お前も一度はノラとなつたのだ

そしてその次ぎにエリーダとなつたのだ

それなのに それなのに

弱いお前の意志は

再びまた迷ひ出したのだ

何うしてもお前が

此の俺を愛し得ないのなら

それを俺が 何うする事が出来よう

俺の今 お前に注いでる愛は

俺の所有する全生命だ いや

自然が所有する全生命だ

これ以上俺に何が出来よう

何うして俺は悩まずに居られよう

報ひられぬ愛

何者よりも必要なもの——それを握ることの出来ない寂しさ  
残つて居る俺の一生を

この寂しさと缺乏とのうちに  
過ぎさねばならぬだらうか

俺とてもまだ戀をし得ない年ではない

俺は戀をもとめる

焼きとろける戀の熱火を

全身心をそのうちで焼きつくす情熱の火を

とは云へ おゝ妻よ

何うして俺がいま

他の女と戀が出来るか

あゝ哀れなる男よ

永遠に充たされざる此の愛の飢渴者

愛を失つて人生に何が残らう

俺は何ものをも持たぬ男だ



またしても俺に勇氣が甦る

絶望の勇氣

自暴自棄的狂燥



あらしが過ぎ去る

静かな沈潜の力

寂しさを

ぢつと噛みしめ噛みしめ

ひたすらに頼る生命の底力



あゝ 何が此の静かな力をゆり動かして

俺に此の世の最後の活躍をさせてくれるだらう

燃ゆる戀の情熱か



焼きつくす革命の烽火か

一切の理性から解き放つて呉れる酒か

何ごとも起らぬかも知れぬ

起し得ぬかも知れぬ



餘りに苦しうな彼女の顔を見ると

それは彼女が 眞實彼を愛して居るからだと思ふ

そのとき俺は

彼女を彼の手に渡さうと思ふ

俺自らの此の宇宙大の愛を殺して

俺自らを

生命を失つた生ける屍として

魂のない 寂しい家庭で

不幸な子達のために一生をさしげることによつて

だが 俺は直きに

子達の愛に引かされる彼女を見る

ほんたうの素直な心に甦つては

静かに 厳そかに なごやかに

俺の魂のうちによりかゝつて来る彼女を見る

さらにまた

ひきつゞきひきつゞき彼女に送つて来る彼の手紙が

たゞ彼女を所有しようとする衝動の狂亂であるのを見る

『来て下さい 来て下さい』

一日もはやく来て下さい

さうでなかつたら私は死ぬ』

これよりほかに何もものもない彼の執着を見る

そのとき

俺の心はまた迷ふ

彼女を 自分の胸から離れさせることは

彼の手委ねることは

たゞ彼女を 荒涼たる野原に追ふやうなものだ

あゝ 生の荒野！

霜枯れて木々の葉は落ち

蒼白い月光が 悽愴な影を落すところに

冷たい風が 颯々として枯木に鳴るのだ

猛獣は牙をとき

狐が誘惑のワナをはり

孤獨と寂寥と恐怖と絶望とを人の魂のうちに充たすのだ

恐らくそこで彼女は

彼女の上に光被した眞の太陽を――

眞の愛の太陽をなつかしむであらう

彼女にとつて

それこそ眞の生命の源であつたことを

さとるであらう

さらにまた

最愛の子達を残して來た愛の園生を思ひ出すであらう

そして

時は既に 遅いことをさとるであらう

慟哭は風とともに荒原を駆けまはり

歎歎は微風とともに 徒らに

野の生靈に悲しみを訴へるであらう

何ものの慰めがそこに残つて居よう

そこにはたゞ

無心の自然が動いて居る

死が 蒼白い絶滅の淵へと招いて居る

あゝ 何うして彼女を去らしめようぞ  
小さな センチメンタルな愛を捨てよ  
たゞ彼女への眞の愛のために  
わが一生をも擲て



『わたしはけふ

あの人をほんたうに死ぬであらうと云ふことを  
たしかに見とゞけて來ましたの